

瞭化および下行性テントヘルニアが認められ、これら3つの所見は脳死を予測させる所見と考えられた。

## 2. 脳血管障害患者における<sup>99m</sup>Tc-ECD 脳血流シンチグラフィの検討

二見 繁美 陣之内正史 大西 隆  
長町 茂樹 星 博昭 渡辺 克司  
(宮崎医大・放)  
中野 真一 落合 秀信 (同・脳外)

脳血管障害患者を対象に、<sup>99m</sup>Tc-ECD を用いて、脳血流シンチグラフィを施行し、その有用性について検討した。対象は、脳梗塞7例、TIA 2例の計9例である。方法は、<sup>99m</sup>Tc-ECD 740 MBq を静注し、20分後に撮影し、局所脳血流異常の有無およびCT所見との比較を行った。また、5例には<sup>99m</sup>Tc-HMPAO 脳血流シンチグラフィも施行し、画質や集積異常部位の範囲、コントラストの比較を行った。結果は、<sup>99m</sup>Tc-ECD では全例に集積低下・欠損を認め、CTよりも広範囲を示す例が多かった。PAOとの比較では、ECDは画質やコントラストはPAOより優れている例が多く、異常範囲は同等か、より広範囲を示した。ECDは、脳血流シンチグラフィに有用な薬剤と思われた。

## 3. 正常ボランティアにおける食物負荷前後<sup>99m</sup>Tc-HMPAO 連続2回投与 SPECT

中別府良昭 岩下 慎二 中條 政敬  
(鹿児島大・放)  
成尾 鉄朗 野添 新一 (同・一内)

Anorexia nervosa 群に対する、対象群として正常ボランティア5人(女性、平均年齢20±0歳)に食物投与負荷前後の連続2回投与、<sup>99m</sup>Tc-HMPAO, SPECT を施行した。小脳、大脳の左右半球の各領域に左右対称のROIを設け、解析を行った。負荷前の左右血流比(Asymmetric index)の大脳局所と小脳の相関は、前頭葉、側頭葉で負の相関が認められ、皮質橋小脳路を介した現象と考えられた。負荷前の各領域の対小脳比に有意差が認められ、局所大脳機能を反映しているものと考えられた。対小脳比は、負荷前後で有意な変化は認められなかった。以上の結果より、<sup>99m</sup>Tc-HMPAO SPECTは、あ

る程度脳の高次機能を反映しうると考えられた。

## 4. 脳梗塞における remote effect

—局所脳血流量(rCBF) 定量による検討—

石野 洋一 森 朋子 野元 諭  
三島 泰子 中田 肇 (産業医大・放)

一側性脳梗塞症例13例に対して<sup>123</sup>I IMP-SPECTによる動脈法局所脳血流量(rCBF) 定量を行い、脳梗塞における remote effect について検討した。定量は、(1)一側大脳半球病変における小脳、(2)大脳皮質病変を有する症例における視床、基底核部、(3)皮質下病変における皮質についてそれぞれ行い、左右を対比したが、症例数の少なかった視床、基底核部を除き有意な左右差を認め、remote effect を血流量の絶対値で確認することができた。これらは経神経的な抑制機序によるものと推測できるが、発症からかなり期間を経た症例でも観察され、器質的な変性に至っている場合もあると思われた。

## 5. Central neurocytoma 2例の脳血流シンチグラフィ

加藤 明 田原 隆 岸川 高  
工藤 祥 黒岩 俊郎 (佐賀医大・放)  
田淵 和雄 阿部 雅光 (同・脳外)

Central neurocytoma は脳室内に発生する比較的まれな脳腫瘍である。今回われわれは手術にて確認された central neurocytoma 2例に、<sup>99m</sup>Tc-HMPAO と<sup>123</sup>I-IMP を用いた脳血流 SPECT 検査を行ったので報告する。症例1は36歳男性。HMPAOでは両側側脳室から右側脳室全角を占拠する腫瘍に一致してRIの強い集積が認められた。IMPのearly scanではHMPAOと同様、腫瘍に一致して強い集積が認められたが、delayed scanでは集積は著明に低下していた。症例2は30歳男性。HMPAOのみ行ったが両側側脳室を占拠する腫瘍に強い集積が認められた。

以上の結果より central neurocytoma は脳血流シンチグラフィにて高い集積を示す可能性が示唆された。